

平成27年度第2回総合教育会議

- 1 日 時 平成27年11月13日（金曜日）
午後3時00分～午後4時30分
- 2 場 所 市役所本庁舎1階第2委員会室
- 3 出席者 市長 星野 信吾
委員 小野寺 巧
委員 箕輪 菊雄
委員 齊藤 久也
委員 森元 州
- 4 欠席者 委員 大久保 春美
- 5 署名委員 委員 齊藤 久也
委員 森元 州
- 6 説明職員 教育委員会 部長 山口 武士
教育政策課 課長 林 みどり
学校教育課 課長 齊藤 宏
教育相談室 室長 藤谷 健二
- 7 事務局職員 総務部 部長 大熊 経夫
秘書広報課 課長 清水 昌人
秘書広報課 主事 柳 茉利
- 8 傍聴者 1人
- 9 議 事
 - (1) 児童生徒の学力向上について
 - (2) 不登校児童生徒の解消について

○清水秘書広報課長

それでは皆さん、定刻となりましたので、ただいまより平成27年度第2回総合教育会議を開会したいと思います。

本日、大久保委員につきましては、所用のため、欠席という連絡をいただいておりますので、ご了承願います。

開会の前にお手元の資料を確認させていただきます。

まず、本日の会議次第。1枚ペラのもの。それから平成27年度第2回総合教育会議資料、学力向上・不登校ということで、冊子でホッチキス止めになっているもの。それから、使用するかどうかはわかりませんが、話の進行状況の中でもし使ったら使用するかということも想定しまして、富士見市教育振興基本計画をご用意させていただいています。

それから、富士見市まち・ひと・しごと創生総合戦略人口ビジョン素案、というこちらA3の2枚ものの折り込みのものですね、みなさまの机の上に配らせていただいているもの。

それから、緑色になりますが、カラー刷りの学力調査結果が表示されている1枚のものものですね、こちらの資料を置かせていただいております。

不足または落丁などございますか。もしございましたら、私どもに申しただければと思います。無いようでしたら進めさせていただきます。

それでは、次第に沿って進めさせていただきます。

申し遅れましたが、本日の司会を務めさせていただきます、秘書広報課長の清水と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。着座のまま、申し訳ございませんが、失礼いたします。また併せまして、本日の事務局の職員の紹介をさせていただきます。私の左手になりますが、総務部長の大熊でございます。それから右手になりますが柳主事でございます。どうぞよろしくお願ひいたします。

でははじめに、当会議の招集をさせていただきました、星野市長よりご挨拶申し上げます。よろしくお願ひします。

○星野市長

皆さんこんにちは。

本日はですね、第2回の総合教育会議ということで、ご案内させていただきましたところ、委員の皆様方には、公私共にご多用の中、ご出席を賜りまして誠にありがとうございます。また日頃より、子どもたちの教育の充実発展並びに、市政運営に対しましても、深いご理解、そしてご協力をいただいております、この場をお借りし、厚く御礼申し上げます。

さて、本日は、富士見市の学校教育における課題である「児童生徒の学力向上」と「不登校児童生徒の解消」につきまして、意見交換をさせていただきたいと考えております。

1点目の「児童生徒の学力向上」についてですが、本年度、富士見市は全国学力・学習状況調査の平均正答率において、全国並びに埼玉県を下回りましたが、埼玉県の調査では、14項目中、8項目で県平均正答率を上回りました。

また、学力・学習状況調査で把握できるのは、学力の一部であります。平均正答率が高いことが全てではございませんが、正答率が低いということは、児童生徒に身に付けてほしい学力が定着していないという表れでもあり、そこから見えてくる課題を整理・解決し、児童生徒の学力向上に努めることが必要であると考えております。

また、2点目の「不登校児童生徒の解消」についてですが、富士見市の不登校児童生徒出現率は、小中学校ともに、平成16年度から国、県を上回っておりますが、中学校では平成19年度、平成20年度の2年度に限り、国、県の出現率を下回りました。

本市では、教育相談室を中心に不登校児童生徒の解消に向け取り組むとともに、中1ギャップの解消を目指し、小中学校の連携についても取り組んでいただいております。

児童生徒が不登校になる理由は様々あると思いますが、家庭訪問など先生方が地道な働きかけを継続し、不登校児童生徒やその保護者との信頼関係づくりに努めることが、不登校児童生徒の解消には不可欠であると考えております。

委員の皆様方には、是非のない意見交換をさせていただきまして、本日の会議により、より良い方向性や具体的な解決策の糸口が見つかればと考えておりますので、どうぞよろしく願いをいたしまして、ご挨拶に代えさせていただきたいと思っております。本日はよろしく願いいたします。

○清水秘書広報課長

ありがとうございました。

なお、本日は、山口教育部長・林教育政策課長・斉藤学校教育課長並びに藤谷教育相談室長に説明員として出席を賜っておりますので、よろしく願いしたいと思っております。

なお、先ほどから写真のほうを写させていただいておりますが、我々の広報担当で、ホームページもしくは広報に掲載させていただきたいと予定しておりますので、あらかじめご了承いただきたいと思っております。よろしく願いいたします。

それでは、以降の進行につきましては、議長である星野市長よりお願いした

と思います。よろしくお願いいたします。

○星野市長

それでは会議に移らせていただきたいと思います。

その前に、本日の会議録署名委員を指名いたします。会議録署名委員に、齊藤委員と森元委員を指名いたします。どうぞよろしくお願いいたします。

本日のテーマは、先ほど申しましたように、2点ございます。1点目が「児童生徒の学力向上」について、2点目が「不登校児童生徒の解消」についてとなります。

ここで、それぞれのテーマについて、一括して概要を説明していただきたいと思いますので、学校教育課長並びに教育相談室長はよろしくお願いいたします。

それでは、学校教育課長からお願いします。

○齊藤学校教育課長

学校教育課、齊藤でございます。よろしくお願いいたします。全国学力・学習状況調査、埼玉県学力・学習状況調査から見えます富士見市の現状及び教育委員会の取組について簡単ではございますが、説明をさせていただきます。

まずホチキス止めの、第2回総合教育会議資料の1ページをご覧ください。

全国学力・学習状況調査は、平成19年度より、小学校6年生、中学校3年生を対象とし、国語、算数・数学を中心に、知識に関するA問題、活用に関するB問題、質問紙調査により実施されてまいりました。

その調査目的は、①児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。②児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。③教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立することにあります。

本年度は、4月21日に国語、算数・数学、理科の3科目で実施をされました。資料1ページから3ページは、それぞれの問題の平均正答率となっております。先ほど市長からありましたけども、残念ながら、富士見市は全国、埼玉県の平均正答率を下回っているという現状でございます。

次に、資料5ページをご覧ください。この5ページから12ページまでが、教育委員会の分析結果となっております。現状を簡単に申し上げます。

まず、小学校の国語では、A問題は話すこと・聞くこと、読むこと、伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項に、B問題は書くことに課題がございま

す。

続いて資料6ページをご覧ください。中学校の国語では、A問題、B問題ともに、話すこと・聞くこと、書くことに課題がございます。

資料7ページをご覧ください。小学校の算数では、A問題は、数と計算、量と測定、B問題は、図形、量と測定、数量関係に課題がございます。

続いて資料8ページをご覧ください。中学校の数学では、A問題は、数と式、図形、関数、B問題は、同じく数と式、資料の活用、図形に課題がございます。

続いて9ページ、お願いいたします。小学校の理科では、A問題では、物質、生命、B問題では、エネルギー、地球に課題がございます。

続いて資料10ページをご覧ください。中学校の理科では、A問題、B問題ともに、物理的領域、科学的領域、生物的領域、地学的領域、に課題がございます。

次に、資料11ページ、12ページでございますが、ここは、児童生徒の質問紙調査結果を分析したものでございます。

併せて、概要になりますが、児童生徒が9割以上肯定的に回答した項目から考えますと、大きく2点、①学校生活に意欲的、主体的に取り組んでいる。②授業において、課題解決型学習の視点をもって取り組んでいる。そういうことが児童生徒からわかるということがあげられます。

課題としましては、小学校では、地域への意識、活字への抵抗感、生活習慣と家庭学習の充実。中学校では、生活習慣と家庭学習の充実、地域への意識、生活と学習事項の関連性。ということがあげられます。

続きまして、少し飛びますが、資料14ページをご覧ください。方向が違うので申し訳ございません。

こちらは本年度の埼玉県学力・学習状況調査結果でございます。埼玉県学力・学習状況調査は、県が独自に、平成15年度から学習状況調査として実施してまいりましたが、本年度より、新たな学力・学習状況調査として4月16日に実施をいたしました。

調査目的は、児童生徒の学力や学習に関する事項等を把握することで、教育施策や指導の工夫改善を図り、児童生徒一人一人の学力を確実に伸ばす教育を推進する。というものでございます。対象は小学校4年生から中学校3年生。教科は、国語、算数・数学、英語、英語は中学校2年生と3年生のみとなりま

す。

そして、もうひとつが質問紙調査となります。その調査結果を見ますと、先ほど市長からございましたが、本市では、14の調査項目のうち8の調査項目で平均正答率が県を上回っております。それも、学年が上がるにつれて、県を上回るという現状もございます。

このことは、全国学力・学習状況調査の結果とはまた違った富士見市の学力の現状を示しているということにもなっております。本年度から始まった新しい調査ですので、何とも捉え難い現状にはございますが、ある意味では、富士見市の学校教育の中で、児童生徒が学力を身に付けて成長していることがうかがえるものではないかという風にも考えております。

次に、戻って申し訳ありません。資料の13ページをご覧ください。

全国学力・学習状況調査の分析に基づきます学力向上に向けた教育委員会の取組を、その資料に基づきまして、簡単にご説明申し上げます。

本市では、平成26年度より、2学期を5日間拡大し、学校における教育活動の充実を図り、児童生徒一人一人に対するきめ細かな学習指導に努めてまいりました。

このことに基づきまして、基礎学力の定着・向上では、学力支援員、すこやか支援員のさらなる効果的な活用、それから児童生徒の学習の基礎基本の定着、家庭学習の支援ということで作成しました、夏・冬のチャレンジの修正・見直しによる基礎学力の定着及び思考力・判断力・表現力の育成。そして、補習授業協力者を有効的に活用した、児童生徒の学習意欲の継続。に取り組んでまいります。

次に、家庭における学習習慣の確立では、学力向上プロジェクトチームが作成しました「5daysチャレンジ」を活用いたしまして、家庭と学校が連携を図り、児童生徒の基本的な生活習慣の確立を図るとともに、自主的に学習ができる児童生徒の育成に取り組んでまいります。

教員の指導力向上では、教科が算数・数学に特化することになりますが、その算数・数学の授業を組み立てるうえでの留意点をまとめた、ひとつの富士見スタンダードという授業のひとつのまとめと言いますか、授業の進め方の資料を作成いたしまして、教員の授業力向上に取り組んでまいります。

また、市の中央図書館との連携・協力、読書推進支援員の活用による読書活

動の推進、道徳プロジェクトチームによる道徳教育の充実・向上、学校給食センターを中心とする食育の推進にも取り組んでまいります。

教育委員会といたしましては、学校を支援し、教員の授業力向上に取り組むとともに、児童生徒の学力向上に努めてまいります。

私の説明は以上でございます。ありがとうございました。

○星野市長

引き続き、室長のほうからお願いします。

○藤谷教育相談室長

教育相談室長、藤谷でございます。よろしくお願いいたします。

つづきまして、不登校児童生徒についての富士見市の現状と取組みについてご説明いたします。

資料15ページをご覧ください。下のグラフにもございますように、小学校では、ここ数年、不登校児童生徒数が30名程度、平成26年度は平成25年度に比べ、不登校児童数が4名減少しております。

一方、中学校では、70名程度で推移していましたが、平成26年度は平成25年度に比べ20名の増加となっております。

本市における特徴でございますが、真ん中にも書かせていただいておりますが、5点ほどあります。まとめると、①小・中学校を通じて、学年が上がるにつれて不登校が増加する傾向にございます。②2学期から増加になる傾向がございます。③年間100日以上の子供は、前年からの継続となっております。④兄弟、姉妹そろって不登校になるケースがございます。⑤中1ギャップだけでなく中2、中3においても不登校が倍増している現状がございます。

次、16ページをご覧ください。

平成26年度の不登校児童生徒数と適応指導教室あすなろへの通室率および復帰率でございます。昨年度、中学3年生の学校復帰人数、完全・部分復帰率が12名中10名で83.3%と高率となっておりますが、これは定時制や通信制への進学した割合も含まれております。

今年度、あすなろに通室届を出している登録上の人数は、小学校7名、中学校14名の24名です。常時5～6名の児童生徒が、毎日あすなろで学習や運動、体験活動を行っております。

続きまして、(4) 不登校児童生徒数の学年別推移でございます。

中学3年生の欄にまるで囲ってございますが、不登校児童生徒対応におけるスーパーバイズしていただいている東京学芸大学の小林先生の見立てによりますと、中学3年生では、進学に向けて不登校数が減少する傾向が強いのだが、ここ数年は中学3年生になっても欠席日数が増える傾向にあるとの指摘を受けてございます。

17ページをご覧ください。(5) 不登校児童生徒数の変容でございます。冒頭に申し上げましたとおり、中1ギャップだけではなく、中2でも倍増している現状がございます。小学校6年生時から中学校1年生時へ、9件から20件、中学校1年生時から中学校2年生時へ、15件から30件、中学校2年生時から中学校3年生時も、約1.5倍となっている現状がございます。

次に下の(6) 小学校の不登校児童生徒数、富士見市、埼玉県、全国の出現率でございます。過去10年間の推移を見ていくと、富士見市は、全国、埼玉県の出現率を上回っており、まだまだ高い出現率ですが、ここ数年は減少傾向です。全国、埼玉県は増加傾向でございます。

続いて18ページをご覧ください。

中学校の不登校生徒数です。全国は増加傾向であり、埼玉県は平成18年度より毎年減少、富士見市も平成22年度より減少傾向でありましたが、昨年度は20名の増加に転じてございます。

19ページをご覧ください。(7) 小中学校別不登校児童生徒数(原因別)でございます。平成25年度との比較で顕著な部分を申し上げますと、太字の欄に傾向が見えてまいります。

依然として、無気力・不安など情緒的混乱が多く見られます。特に顕著なのは、平成26年度、中学校における意図的な拒否が前年比3倍となっていることです。また、親子関係をめぐるトラブルも増加しています。これらの意図的な拒否や親子関係トラブルの増加分が前年度からの20名増加に反映されているものと考えられます。

なお、生徒指導調査上でのそれぞれの言葉の定義ですが、「無気力」とは、無気力でなんとなく登校しない。登校しないことへの罪悪感が少なく、迎えにいったり強く催促したりすると登校するが、長続きしない。

また、「不安など情緒的混乱」とは、登校の意志はあるが身体の不調を訴え登校できない、漠然とした不安を訴え登校しない等、不安を中心とした情緒的

な混乱によって登校しない、あるいは登校したいができない状況です。

また、「意図的な拒否」とは、学校に行く意義を認めず、自分の好きな方向を選んで登校しない。という定義になってございます。

次にこうした実態を踏まえ、不登校児童生徒（長期欠席児童生徒）解消に向けた本市での主な取組7点を申し上げます。

20ページをご覧ください。1つ目は、小中連携支援シートの活用です。小学校から中学校へ不登校児童生徒が急増する中で、早期の支援を行うものです。小学校6年生時点での欠席数の多い児童への中学校への申し送りのシートとともに、紙上コンサルテーションシートを活用し、現在の6年生への対応とともに中学校の先生方への事前の情報提供から、対策を講じるシステムとなっております。

2つ目は、いじめ・不登校未然防止のためのピア・サポート活動の充実です。今年度は、富士見台中学校区の4校が研究を進め、子ども同士が支え合う学校風土づくりを行っております。

3つ目は、スクールソーシャルワーカーの活用です。ひきこもりや閉じこもり状態からの脱却を図るための家庭訪問やケース会議等への参加です。のちほどスクールソーシャルワーカーの事例については説明いたします。

4つ目は、中学校配置のスクールカウンセラー、ふれあい相談員による相談体制の充実です。教室には、入れないものの相談室や学習室での登校ができる児童生徒がおり、悩みをいつでも相談できる体制づくりを整えております。

5つ目は、生徒指導訪問、相談室の巡回相談、指導主事による指導・助言体制の充実です。学校担当指導主事による不登校児童生徒の個々の聞き取り調査や効果的な対応など広めていく取組を行ってまいります。また、相談室勤務の相談員による各校を回る巡回相談をとおして、支援策の提示や助言を行っております。

6つ目は、適応指導教室「あすなろ」での指導・助言です。あすなろに通う児童生徒の多くは、人間関係作り、対人関係作りに課題が見られ、どう人と関わってよいか迷う児童生徒が多く見られます。また集団を苦手とする場合も多くあるため、少人数での関わりや活動を通して少しずつ自信をつける指導を行っております。

7つ目は、教育相談室による相談・支援です。21ページ、訪問時における指導・助言についてでございますが、10月より相談室の相談員による巡回相

談をもうけ、指導・助言を行ってまいりました。さらに来週からは、生徒指導訪問にて、学校担当が各校をまわり情報共有や指導・助言を行ってまいります。その際のポイントがそのページにある内容でございます。

5つポイントを挙げております。①市の取組の周知とともに積極的に活用すること。②各校の不登校の児童生徒一人一人の現在の状況の確認をすること。③各担任の先生の関わり頻度を確認すること。④不登校解消に向けた学校の特徴的なアプローチ等の情報を収集すること。⑤特に効果のあった学校の取組を他校への訪問時に情報提供し活用すること。

何よりも、今回の生徒指導訪問時において、学校長をはじめとする先生方に不登校減少に向けた取組への意識改革を図るねらいもでございます。

続きまして22ページから23ページでございますが、こちらは、不登校支援への効果的な取組等、様々な研究機関、文部科学省から出されている取組等でございますので、教育委員会としてもこれらを基に、支援策を学校とともに考えていくという視点を明示させていただきます。

続きまして24ページでございます。こちらは、スクールソーシャルワーカーの活用実績でございます。昨年度はのべ、420件のケースへの関わりがございました。25ページの、平成27年度1学期のケースでございますが、160件のケースへの関わりがございました。

それでは最終ページをご覧ください。スクールソーシャルワーカーが関わったケースにより、状況が好転した例を紹介いたします。

中学校1年生の男子で、小学校3年ぐらいから登校しぶりを示し、小学校5、6年は全欠席であり、中学校に入ってから登校もしていない状況の生徒でございました。スクールソーシャルワーカーと担任とで連携し、家庭訪問を繰り返すことで、リビングでの話ができるなど信頼関係を築くことができるようになり、あすなろ指導教室に、夏に流しそうめんの体験をするなど少しずつ家から外に足が向くようになり、そして、通室につながったケースでございます。あすなろに通うため自転車も購入するなど良い方向に向かい、現在は、週に1回程度ですが元気な姿を見せています。

もう一つのケースは関係機関との連携を図り、経過観察を行っているケースでございます。

虐待の疑いということで、いち早く情報をキャッチし、ケース会議に参加し、

10月現在、兆候は見られず、元気に登校している姿を確認しています。

そのほかにも、中学校入学以来、外に出ていけなかった生徒が、スクールソーシャルワーカーの働きかけにより、適応指導教室「あすなろ」にて卓球をするなど、好転するケースなどがございます。

いずれにしましても、すべての児童生徒が楽しく学校に通えるように、わかる授業やできる喜びを味わえる授業、自他ともに認め合い、支え合うことのできる学校、一人ひとりが輝くことのでき、居場所のある魅力ある学校づくりを行うことが重要であると考えます。残念ながら学校に通いたくても精神的につらい児童生徒にとっても様々な解決への道があることを示し、「ひきこもり」「閉じこもり」状態から脱却するため、保護者に対しても情報提供をより多く行い、将来の自立に向けた支援策を関係機関と連携を図り進めていくことが重要であると感じております。

以上で、私の説明を終了いたします。

○星野市長

はい、ありがとうございました。

今、学校教育課長から学力向上、教育相談室長から不登校について、概要として資料をもとに説明をしていただきました。本当にありがとうございました。

さてこれから議論を深めていきたいという風に思うんですけども、まずその前に、先ほど司会からありましたように、資料を若干出させていただいた部分があるんですが、先日議会の議案説明会をさせていただいた中で、委員の皆さんご存知のように、今、総合戦略会議ということで、これからの5年間の地方創生の部分での資料作りをすることで、併せて人口ビジョンですね、これも2040年にどのくらいの人口になるかということでの資料作りを、今、しているんですが、その資料を若干出させていただいたんですけども、本市に置きましたは、実は第5次の総合計画をつくる平成22年の時の、平成27年の人口予想というのが、10万と7050人ぐらいの予想だったわけですね。実際に今現在、ご存じのように、10万9952人ということで、5年前の予想からたった5年で約3千人ほど富士見市の人口が、予想よりも増えているということですね。

貝塚東のミニ区画整理、それから谷ツ合のミニ区画整理もそうですけども、両方街開きに行かせていただいたんですけども、ほとんどの世帯が子育て世帯で、これは教育委員会さんにもご協力をいただいて、次の世代を担う若い人たちに、富士見市に入ってきていただこうという市の施策をこの間、させていただいて

きています。

例えば、保育所も来年4月に、ふじみ野東に90人規模の開園をいたしますし、毎年のように作っていますが、残念ながら待機児童は出ています。

児童クラブにつきましても、来年、鶴瀬、水谷、勝瀬と、増築をしているのですが、こちらは待機児童は出ておりませんが、小中学校へのエアコンの設置であるとか、中学生への医療費の無料化であるとか、それからこちらの隣の病院で、今度は小児の救急のベッドが45床できる、来年4月の予定ですが、そういう環境を作ってきたということ。

それから、子ども大学シリーズ、3シリーズ今やらせていただいていますけれども、そういった意味で、子どもさんを持つ親御さんが、富士見市を選んでいただける環境をとということで今、やってきていますが、それがそういう意味では評価をされてきているのかなという風に思っています。

ですので、ハードの部分では、いろいろ手立てを、施策を講じながら、取り組んできた結果で、あとは、計画的に残された部分を行っていくことになると思うんですが、いよいよ、ソフトの部分である子どもさん自身の学力ですとか、そういったところに、やはり我々もしっかりと目を向けて、今現在も取り組んでいただいているんですけども、今まで以上に取り組んでいかなきゃいけないでしょうし、また議会、また子どもさんをもつ保護者のほうも、今度はそういうところに視点がまず、いくであろうという風に考えています。

そういった意味で、今回総合教育会議でこの1点を取り上げさせていただいたところでございます。

今学校教育課長から、今取り組んでいることの概要を縷々説明をさせていただいて、確実に14項目中8項目が埼玉県平均よりも上回っているということで、確実に成果は出てきているのかなという風に思いますけれども、でもやはり、さらにそれを充実していくことが、保護者の方からも求められてくる部分ではないかなという風に思いますし、またそれをすることによって、今後富士見市を選んで住もうという方も、さらに増えてきていただけるのではないかなという風に思っていますので、これから議論を深めていきたいという風に思っています。

やはり、街づくりはよく、人づくりという風に言われますので、私もその通りではないかなという風に思っています。ですから、そういう子どもさんたちをしっかりと富士見市で教え育てることが、やはりその方々が、この富士見市の将来をまた、ある意味で担っていく、役割を担ってもらえるのではないかなという風に思いますので、よろしく願いをしたいと思います。

それでは今、学校教育課長から、縷々概要の説明がありました。その点も含めて、またそれぞれの委員さんから、学力向上に向けてさらにどういう視点を

活かしながら取り組んでいくことが望ましいのかというようなことも踏まえて、それぞれの忌憚のないご意見をいただければありがたいかなという風に思いますので、順次これからお話をいただければという風に思います。

それでははじめに小野寺委員さんからお願いします。

○小野寺委員

はい。学力向上についてということで、私も学校にいる頃から、どうしたら子どもの学力を上げられるんだろうということ、いろいろなことを調べて勉強したり、先生方と話し合ったりしてきました。その中で、全国のほうで秋田県と福井県が数年間ずっと1位2位と上位のほうにあるという、どういうところがその秋田県と福井県は違うのかなあということ、調べていただくことがございます。

それでわかったことが、両県で2つの県で共通なのが、まず、ひとつひとつの授業の規律がしっかりしていると。全国の他の県と比べてですね、学校にもアンケートが来ますので、その結果で比べると授業規律がきちっとしていること、2つ目が、教師集団のまとまりが良いこと、3つ目が、家庭環境が良いと、いう風にあるところに出ていました。

それで、具体的にいうと、授業については、特に秋田県なんかの場合はですね、授業スタイルが学校全体で統一されているということが挙げられたそうです。それから、福井県なんかでは、教師集団のまとまりについて申し上げますと、教員間のコミュニケーションが非常に活発で、何をやるにしても先生方がいろんな意見を出し合って、こうしたらいいあしたらいい、例年通りということがなくて、先生たちが一致団結して何にでも取り組んでいるということがありました。

13ページのところに、富士見市教育委員会の取り組みということですが、例えば今のお話を参考にしますと、家庭における学習習慣の確立のためにということで、取り組みがなされています。私も学校にいるときは、毎日1ページ以上何でもいいから必ず家で、自分で考えて勉強をしてきなさいと、そして毎日それを担任の先生に提出しなさいという取り組みをやってきましたが、そういう家庭における学習習慣の確立のための取組、それから、その右側に教員の指導力向上のためにとありますが、授業の流れを富士見スタンダードということで統一しようという試みがなされています。これも秋田県の取組なんかに通じるのではないかと。

まずは、こういう今、富士見市教育委員会がしている取組みを徹底することが、まずは第一に考えられることかなと思っています。新しい取組については、他の委員さんから話が出るかと思っています。とりあえずは、今の取組みを徹底していきたいなという風に思います。

○星野市長

はい、ありがとうございます。それでは、森元委員さん。

○森元委員

はい。私も日頃事務局を預かっているものとして、学力の向上策は、やはり常に考えていかななくてはならない教育委員会の使命だと思っています。

ここは総合教育会議でありますので、未来の人材である子どもたちに、ひとりひとり教育を保障して、伸ばしていくというのは教育の使命であるし、それを成し遂げない場合は、富士見市の人材は育たないということなので、そのへんは意識していかななくてはいけないというのは、常に認識しているところでございます。

この数字だけ見ると、落ちているというのが見えるわけですが、今小野寺委員長より秋田・福井の話がありましたけれども、例えば私立に行っている子供たちが何パーセントいるのかなという風に考えたとき、たぶん福井県の私立の進路状況、秋田県の進路状況というのは、富士見市と違って、やはり富士見市は私立に行っている小中学生の割合は、それに比較すると、高くなっている可能性がありますので、データだけでは一概に言えない部分もあるかと思えます。

しかしながら、これをさらに現状を伸ばしていくという努力を私たちはしていかなければいけないわけですが、私は、この児童質問紙調査というのがあるんですが、4ページ、富士見市の子どもたちの意識として、例えば家で自分で計画を立てて勉強しているというのは、全国を上回っている。家で学校の宿題をしているというのも全国を上回っている。ところが、問題は、国語の勉強が好きだ、算数の勉強が好きだ、理科の勉強が好きだ、というところが全国を下回っている。となると、自分で計画を立てて勉強していて、家で宿題をやっているという意識があるにも関わらず、やっぱり勉強が好きじゃないというところというのは、やはり私ども1時間1時間の授業を預かっている学校が、どのようにさらに子どもたちを伸ばしていく、何より意欲というのが大切だと思いますし、目的に向かって点数を伸ばすというよりも、勉強が楽しい、好きだ、さらに学びたい、できた、わかったというところを授業の工夫によって伸ばしていくことが一番の近道なのかなという風に考えております。

従いまして、細かい施策というのは様々あると思いますけど、そこを踏み外さず、富士見市の子どもたちは本当に良い原石を持っているということを前提に、どのようにその施策を展開していくかということを教育委員会、あるいは市長部局と連携を図り、やっていくことが必要なのかなという風に考えております。

○星野市長

はい、ありがとうございます。それでは、簗輪委員さん。

○簗輪委員

はい。数字が出てしまうと、全国、埼玉県よりも富士見市低いというところに当然目が行くわけで、私自身もそうなってしまっているし、多くの人がそこに流れて、富士見市何やっているのかなという思いに駆られてくるということは、当然推測できるわけですが、何ポイントかの差がどれだけの意味があるのかという点では、もっと細かく分析されないとダメだろうなという思いがあります。それから、例えばこの得点を上げるために過去問をやるだとかそういうことをやれば、手っ取り早い話、少しのランクアップは重々可能だろうと思うんですけども、そういうことではないだろうという風に思うんですよね。学力という向上を目指したときは、そういう対応ではまずいな、逆にマイナスになるなという風に思っています。

基本的に学力という言葉の定義なんですけども、いろんな人がいろんなことを言うので、だいぶ混乱している状況もあると思うんですよね。基本的に僕が思っているのは、achievement の訳語だということなのですよ。教育によって達成できたものをはかるという、どれだけ定着したかということで、いろんな力だとかが入ってくると、だいぶ学力そのものが少し幅が広がって、概念がそれていくのではないかなという感じはしているんですけども、教育によって達成された内容をどれだけ身に着けたかというところで図っていくということで良いだろうと思っています。

そういう点からいうと、教育長が言ったように、基本的に僕は、授業でどれだけ質の高い内容を学習できるかにかかっているという風に思うんですよね。それで市の教育委員会の取り組みで、いろんなことをやっているんですけども、例えば、否定的な発言になるかもしれませんが、夏冬のチャレンジという課題を作成して子どもたちにやらせているんですけども、それだけで良しとしてしまうと、逆効果になってしまうのではないかなという風に思っています。学力が向上するという局面は、どういうところかという、ヴィゴツキーの最近接領域の理論というのがあるんですが、自分ではまだわかっていないところを、少し背伸びして、そこに飛びついて、自分の認識の中に入れて、それを自分の今までの知識と内化していく、そういう過程でもって、学力は向上していくという風に考えているんですよね。そうすると、やはり学びの段階で、何らかのわかっていることを繰り返すというよりは、わかっていないものに飛びついて自分のものにしていくと、そういう授業なり教育の中身が必要だろうという風に

思うんですね。ですから、基礎と言いつつも、単純なプログラムされた計算だとか漢字の書き取りを、繰り返してそれを定着させればいいということで学力向上という風には僕は評価しないほうがいいだろうという風に思っているんですね。その辺のところをきちっと踏まえると、基本的には質の高い授業をどうしていくか、教材の作成であったり、先生方の様々な日常の実践を公理しあう中で、同僚性を高めて、子どもたちの現状に合うような授業を展開するだとかということが追及されていくことが大切だろうなという風に思っています。それを抜きにしてしまうと、僕もその先ほど4ページの資料を最初に見たときに、家庭で、家で学校の宿題をしているというのは、県や全国よりも高い数値なんですね。なのに、得点が低い、これはどういうことなのだろうという風に思ったのですけども。家で宿題やってればいいわ、ということで、そこに先生方も安堵してしまって、質の高い授業を追及するところを手抜きしてしまうと、まずいなという風に逆に思ったのですよね。ですから、単純に出された宿題をこなしているのではなくて、やっぱりわからないものをどういう風にして飛びついて獲得させていくのかというところの工夫なり努力が求められているなという風に思っております。

○星野市長

ありがとうございます。それでは最後で恐縮ですけど、齊藤委員さん。

○齊藤委員

3名の委員さんの話を聞いてですね、さすが先生経験者であり、これには永遠のテーマとしてね、取り組んできた奥深さが、言葉があったなという風に思います。私はある意味、保護者代表の一人としてここにいますけども、じゃあ自分の子どもを、算数と国語と英語だけで判断されてたまるかというのが実際にはあります。どこかの中学校では、埼玉を代表して全国に飛び立った富士見市の中学もありましたよね。もしかすると、社会・歴史をこの教科に入れたら、富士見市はもしかすると、全国を上回る結果が出るかもしれない。ある意味人間力という相対で人というものを捉えたときに、国語だ算数だ勉強というものはひとつのパーツでしかなくて、私は今の社会情勢なんかを見ていると、確かに学力を向上させるというのは目に見えて数字として表れるもので判断しやすいですけども、見えるからこそ、難しさもあるのかなと思いますし、人間という総合力で人間で判断してあげたいなど。

実際、私自身も、小学校中学校の頃一切勉強というものはしませんでした。なんでしなかったかというとなん簡単なんです。やり方がわからなかったんです。どうやって勉強すればいいのか。宿題出されてこの問題やってきなさいって言

われれば、何とか頑張ってやりますよ。でもどうやって解いていいかわからなければ、教わって解くんですけどね。最初は勉強をどうすれば、どうやって勉強すればいいのかがわからなかった。でも高校に入ってから、ちょっとしたきっかけで、勉強ってどういう風にすればいいんだろうというのがわかってくるんですね、やっぱりやってて楽しくなるというか、面白が出てくるんですよ。それで実際テストを受けると結果が出てくると、もうちょっとやってやろうかって。こういう風になってくるんですよ。

それで僕は、学校の先生によって教え方がうまいとか下手というのは少なからずあるかもしれないけども、やはり授業中に子どもたちに興味を引く内容、わかりやすい内容を伝えていくということ。森元さんも言われてましたけども、その次に面白みっていうのかな、勉強の。そういったものを伝えられて、子どもたちが次のステップに上がれるような授業というものを考えていくといいのかなという風には思っています。ただ、ひとりで勉強しなさいと言って、部屋に閉じこもっていてもなかなか、親っていうものがわからない子には、わからないのかなど。実際教える場の授業というものがありますので、その授業の場において、どうやって勉強していけばいいのか、どういう意味ですのかということも伝えていくと、ただ、これはこうなるからこうでいいでしょ、一方的に教えるだけじゃなくてね、生徒とのキャッチボールをしながらやっていければいいかなど。ちょっとまとまりませんが、頭に浮かんだまましゃべってしまいました。すみません。

○星野市長

ありがとうございます。今4人の委員さんから、それぞれの立場で、お話をいただいたのかなという風に思います。そこで、学校教育課長、こういう学力の調査結果が出て、それを次の年度にどう生かしていくのか、というような議論というのは、どのようにされているんですか。

○斉藤学校教育課長

はい。この結果分析はですね、指導主事を中心にそれぞれの学校について、そんなに細かくはないですけども、一応分析はしております。それをですね、今度は、それぞれ指導主事が担当している学校がございますので、その学校へ行きまして、学校は学校自身で分析そして課題の解決に取り組んでおりますので、そこに教育委員会の分析した結果も一緒にして、学校が主体的になりますけども、学校が取り組むことに対して、指導、助言そして支援という形で、投資をしていくという形での取り組みを進めるということでございます。

○星野市長

わかりました。そういう形で対応しているということですね。それで、それぞれ委員さんからいろんな視点でもって、お話をいただきました。

小野寺委員さんからは、秋田と福井のお話が出されて、こういう取組がされている、要は、授業スタイルが統一をされたフォーマットで行われていると、それから教師間のコミュニケーションがしっかりとされていて、それぞれが連続性が保たれていて、教育力を上げているということですね。森元さんからは、子どもの能力を生かした教育を行っていく。箕輪委員さんからは、その中でも、質の高い授業をどう組み立てて行っていくのかということが必要じゃないかと。齊藤委員さんからは、人間力の向上、要は総合力で学力を上げていくことが望ましいのではないか、という意見が出されたと思うんですけども。

私も、子どもはそれぞれの芽がありますので、同じに育てることはなかなか難しいであろうと。ですから、齊藤委員が言われたように、総合力、要は連続性を持てるような環境をどういう風に、小学校であり、中学校であり、作っていくことが、小1の問題もありますし、中1のギャップの問題もありますし、そこで引っかかってしまうと、つまづいてしまう。この後のテーマとなる不登校にもなっていってしまう、というようなことがあるんですけども。質の高いですとか、総合力高める、そういった環境というのはどういう風な形をとっていけば、そういう環境が作っていけるのか。ということについて、ご意見を頂ければありがたいかなという風に思うんですけども。小野寺委員さんから、どうでしょうか。

○小野寺委員

学力の状況調査はあくまでも平均点で、外部の人から見ると、要するに、点数で他と比べると高い低いという風にしか見えなくて、ひとりひとりの子どもの顔というのは、当然外部の人ですから、わからないわけです。でも、学校で実際にその子どもたちに毎日接している教員は、この子は確かに算数できないけど、とても他の子どもたちに親切で、友達作るのがすごく得意な子だよな、とか。音楽、歌がとても好きで上手に生き生き歌う子だよな、とか。運動が好きで、運動会なんか本当に一生懸命生き生きしているよな、とか。この子あんまりしゃべらないけど、コツコツコツコツ努力する子だよな、という、我々には見えない、その子の持っている良いものを、たくさんこう、教員、もちろん親もそうですけども、わかっているんですよ。それを、点数が何点だったとか、そういうことはそういうこととしておいて、やっぱり子どもはできたいと思っていますから、できるようにしてあげたいんですけども、それはそれでまた考えるところですね、その子が持っている良さ、いろんな良さを、こんな良いと

こあるじゃない、あなた頑張りなさいよ。こんな良いところもあるよというのを、いろんな先生が関わっているわけですから、いろんな先生がそういう声掛けをする。あるいは何かできた時に、できたよね、すごいよねという達成感とか、充実感とかを味わわせてあげる。あるいは、友達に親切にしたときに、とっても良いことしたよね、自分も大事にしなくちゃいけないけど、周りの人を大事にしなくちゃいけないよね、というそういう声掛けを、周りの人、地域の人もそうですし、保護者、教員そういう人たちが、その子の良さを見つけて、その子に自信を持たせるように、達成感を味わわせるように、やる気を育てるように、声掛けをしていく。まずはこれが、一番お金がかからなくて、一番効果がある。でも時間はかかるかもしれないですけど、大事な環境づくりかなという風に思っています。

○星野市長

はい、ありがとうございます。森元委員さん。

○森元委員

はい。やはり、これはひとつの数値といえども数値として、客観的な指数であると思いますが、体力も含め学力も含め、分析していくとですね、体力なんかは、昔であれば、真ん中が一番高い山だったという風に思うんですが、今の問題は、ふたこぶラクダになっているところの平均点であるという。実態がふたこぶラクダ近い部分があると思います。

スポーツでいうと、365日のうち300日くらい運動で、専門的に、朝もやり昼もやり土日も夜もやり、勉強もやっている子は、夕飯を食べる時間も惜しいくらい、あるいはおにぎりを頬張りながら塾に向かっている。家に帰ってからは宿題をやらなくちゃいけないので、寝る時間がないくらい頑張っている子もいれば、一方、全く運動しない子、体育の授業以外は運動しない、部活もやらずに、全くやらない。学校の学力という部分でも、やはり宿題もあまりやりたくない子と、そういう両極端が実態としての、現在の、体力やこの学力テストの平均点があると思われまますので、その焦点をどう絞っていくかというのが、教育委員会も考えていかななくちゃいけないと思います。

例えば学力で、ふたこぶ山のふたつのほうにあるのは、もしかすると、経済的にも塾なんかに行けないお子さんがいらっしゃるかもしれませんし、他方、おにぎりを頬張りながら塾に行ってるという現実もあるんでしょうけども、幸い富士見市では、福祉のほうで、そういう学習塾みたいところと連携して、そういうお子さんを対象に、学力の対策をしている。そういうことをさらに充実していく必要もあると思いますし、やはり学校の授業が基本だと考えた場合

には、先生方の1時間1時間の授業の質の向上を図っていかなくちゃいけない。それには学校の事務の合理化を図っていくという意味では、ある意味ICTの活用というのをさらに推進していくという部分も必要であると思いますし、小学校の高学年になれば、専門性が、音楽専科がついているように、それは体育でも算数でも理科でも、専科という視点で、ある程度プログラムを組むとすれば、小中一貫教育の推進という視点、あるいは連携教育という視点も必要であると思いますし、もしかすると、ICT教育を推進することによって、さらに個人に応じた学習の効率化というのが図られ、先生方の負担も増えていくかもしれないし、AETの配置をさらに拡大することによって、小学校の英語教育の充実もさらに図られていくということで、やはり1時間の質を高めるという視点で、教育行政がどういうことを図っていくというのが、一層考えていかなくてははいけないし、今お金をかけているところに無駄は無いのかということも改めて見ていく必要もあるかもしれないと、私は思います。

○星野市長

はい。今、高めていくための事務の合理化ですとか、これは箕輪委員さんもお先ほど言われた部分ですけども、質をさらに高めていく。それと、新しくICT教育の話も出されましたけども。それでは箕輪さんのほうから、よろしいですか。

○箕輪委員

質の高い授業ということを書いてしまったんですけども、目新しいことをしなくても、今の現状の中で、僕はできるのではないかなと思っているのが、研究授業を毎年学校で行っていて、市の委託もあるいは県の委託とかもあるんですけども。基本的には、内部の先生方だけですとやっぱりちょっと弱いから、外部から専門家を招いてその指導を受けながら、というスタイルは非常に良いことだという風に思うのですよね。それで2年間の取り組みの中で、成果を発表することが行われているのですけども、そういう体験を通じて、特に小学校は、多くの先生が質の高い授業はこういう風にやれば良いということで学んでいるじゃないかなという風に思うのですよね。

実際に授業参観に行って、すごい良い授業だなという風に思うことも結構ありますし、そういうことを行っていくことが非常に大切だなと思っているのですよね。ただ、それが、もうちょっとこういう工夫があってもいいんじゃないかなと、たまに思うことがあるんですけども、2年間例えば国語なら国語、算数なら算数の授業を取り組んできて、一応研究発表が終わると、それで途絶えてしまうのかなという懸念があるのですよね。先生方も、翌年変わりますし、

2年間培った授業方法なり、教材を作ってきたその中身なりが、新しく入ってきた先生にも受け継がれて、少なくとも5年くらいその学校で研究授業に取り組んだ教材であれば、みんなが共有できるまで継続して、学校の宝として、新しい先生にも伝えていくという、そういう作業が足りないんじゃないかなという風に思うのですよね。2年間終わってしまうと、せっかくの宝はお蔵入りみたいになっちゃっているんで、そうじゃなくて、せっかく作り上げたものをもっと自分たちのものにしていく。だからあまり回数多く国語やったから次は算数とかっていう風にテンポを速めないで、じっくりと先生方の中にこそ、その手腕が、技量なりが定着するような取り組みが必要だなという風に思うのですね。そうなるともっと、教師の力量アップになって、質の高い授業展開は、より出来上がっていくんでないかなという風に思います。

それで、中学校は逆にそういう取り組みが少ないので、是非やってほしいということを結構今までも言っているのですけども。教科別の部会なりで、どういう授業をやっているかをお互い見合いながら、こういう方法でやれば、うちの生徒には良いんじゃないかというのを作り上げていく努力が必要なんだと。3人いれば僕は学校ひとつで、部会の中で取り組みができるんじゃないかと思っているのですけども、2人しかいない所はなかなか難しいところがあるので、近隣の隣り合う中学校でチーム組んでやるだとか、市全体だとやっぱり小回りが利かなくなると難しい面があるので、3人以上確保できるような、そういう教科部会をぜひ6校の中学校の中で工夫して、それぞれの教科別にできたらいいな、それで小学校でやっているような実践を教科ごとにやっていければもっと質の高いものが出来上がるし、それからもっと外部にいろんな民間の研究団体があるので、そういう所に積極的に、指定された研修だけ行くのではなくて、手弁当でも良いから、そういうところに行って、他の先生の良い授業を盗んでくるとか、そういう意気込みが持てるような奨励の仕方が必要だなという風に思うのですよね。その辺の取り組みの中で、授業の改善というのはかなり、もっと高めることができるのではないかなという風に思っています。

それからもうひとつちょっと気になるのは、先ほど森元委員が言ったように、ふたこぶラクダでは無いかという懸念は僕も抱いているのですけども、この平均点だけでは、どのくらいの幅があるのか、というのはわからないのですよね。だから、不登校の関わりだとか、経済的格差の問題もその背後には潜んでいると思うのですけども、学力というのは、僕は身長なんかと同じように基本的には釣鐘状の正規曲線を作るだろう、それに似たようなものになるだろうという風に思っているのですけども、全員が100点を取らせなくても良いと思うのですよね。やっぱりその理解がまだ足りなくて、左のほうのカーブにいる子もいるだろうけども、そういう釣鐘が、平均点が右に移動していくような全体の

向上と、その幅が狭まるような取り組みを目指せば良いので、全員が100点という目標を立てちゃうと、それは達成不能の状況になってしまうので、現実可能なところで僕は良いし、左のほうの子どもたちについては、支援員なんかの力を借りて、どうフォローしていくかという二重の対策の中で取り組んでいけばいいのかなという風に思っています。以上です。

○星野市長

はい、ありがとうございます。縷々いろいろ細かいところまで、ご指摘いただきありがとうございます。それでは最後、齊藤さん。

○齊藤委員

今、資料の中の14ページの、平成27年度埼玉県学力学習状況調査結果を見ているんですけども、その小学校を見ますと、埼玉県の中の平均を下回るところが、数字としては目につくんですけども、逆に中学校になりますと、富士見市のほうが県を上回る数字が随所にあるのかなと思います。じゃあ小学校と中学校何が違うのかなあというと、中学校ですと、国語算数英語となりますと、専門の先生が各クラス同じ先生が教えていくんですけども、小学校になると、1人の担任が、算数国語すべてを教えていくと。こうなった時に、その時にその先生の教え方の問題で、同じ学校でありながら、隣同士のクラスの先生が違うだけで、教え方によって生徒に伝わる理解度というものも変わってきてしまう。同じ先生が中学みたいに各クラスに回るということになると、同じ情報が各学年各クラスに入っていく。もしかすると、ある意味中学生を迎える前にね、4年生5年生6年生ぐらいになった時には、小学校でも、ある意味教科の担当の教員ていうのかな、算数なら算数専門で、他のクラスを全部教えるとか、国語を全部教えるとか。という風にやってくると、先生自身の実技も国語の教え方も創意工夫というものをもうちょっと考えてきて、伝えやすく伝わりやすく、という工夫がね、もしかするとされていくのかなと。それが現場で可能かどうかということにはちょっとわかりませんが、やはり中学校小学校の結果だけ見てしまうと、専門の人間が教えるのと、すべての教科を万遍無く教えるときに、少なからず教科によってバラつきが少し出てしまうということはあるのかなという風にちょっと見えました。

○星野市長

ありがとうございます。だいぶ、最初にひとつのテーマで時間が押してしまいましたけども、本当に貴重なご意見いただきましてありがとうございます。かなり、議論の中で、今後の教育の在り方、それから課題、そしてどう進めて

いけばいいのかというのが、私からして、若干見えてきたような気がしますので、また今後この部分に視点を当てて、さらに次の議論をですね、これから改めてさせていただければという風に思いますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

それで次のテーマですが、不登校児童の部分でございますけれども、先ほど室長のほうからありましたように、不登校児童は小学校のほうで若干、25、26比較すると、0.06ポイント下がっているけれども、中学の部分では、先ほど出たように中1ギャップだけではなくて、2年生3年生になって、増えている傾向が出始めた。ということで、0.8ポイントぐらい前年度よりも上がっているということでもありますけれども、ちょっと深刻な問題かなという風に思ひます。

実は先日、ある事業で地域に行ったときに、相談された方がいて、実は私の孫が不登校になっているんだ、と。ただ私は一方的な話を信じるつもりはありませんので、確認をしてから判断をさせていただきたいと思ひますけれども、その方の言う話では、そのお孫さんの髪の色について先生から指摘がされて、それで生徒がすごくそれを気にして、行かなくなってしまったということが発端らしいとそのおじいちゃんは言われていましたけれども。たださっき言ったようにそれが正しいかどうかはわかりません。ですので、本当に不登校というのはいろんな要因があつて、その一人一人の個性によってなつたりならなかったり。この要因でなる子もるし、そうでない子もいるし、ということであるんですけれども。実際に中学生で増えていってしまっているということで、相談室のほうであれだけの体制を組んで、あれだけ真剣にやっていたいての結果でちょっと残念なんですけれども、これをどうこれから改善していくか。まず、なぜ不登校児童というものが出てしまうのか。ということで、みなさんから一言ずついただきたいという風に思ひうんですけれども。小野寺委員さんどうでしょうか。

○小野寺委員

なぜ起こるのか。一般的に言われているし、自分もそう感じているのは、子どももの時、幼児期、小学生中学生と、人はだんだん人間としていろんな力をつけて、成長してくるわけですが、それぞれの時期に身に着けないといけないというか、発達課題と言いますか、あるんだと思ひうんです。例えば、小さい赤ちゃんの時は、安心してお父さんお母さんに守られて、生活できることによつて、人間に対する信頼感みたいな元ができる。その上に、いろんな力が積み重なつてきて、我慢できたり、友達と仲良くやつたり、目標に向かって努力する力ができてきたりという、そういう小さいころから一個一個積み重ねて、身に

着けていくべき力、発達課題というのがあると思うんです。それがどこかで、身に着けられてこなかったものが、ちょこっとずつ、誰にでもあるんでしょうけども、抜けているところがある、そういう子が不登校になりやすいのかなという感じがしています。それを、もう1回身に着けさせる、作る、そういう力をつけさせるためには、その力をつけるために1年かかったとすると、その時期を過ぎちゃうと、何年もかかる。幼稚園生なら1年間かかって身に着くんだけれども、中学生になってその力を身に着けようとする、5年も10年もかかってしまうというようなどころがあって、適時性と言いますか、その時にやっぱり適正な対応をして、適正に身に着けておけばいいのに、その時期を逸してしまったために、あとで大変に苦労しているというのが、教育相談室であったり、相談員さんたちであったり、スクールソーシャルワーカーの方あるいは福祉の方、なんかじゃないのかなという感じがしています。要するに、発達課題を適切な時期にクリアしてこなかった、そういう子どもたちが不登校になるのではと、発達障害も含めてですね、そんな感じがしています。

○星野市長

森元委員さん、どうでしょうか。

○森元委員

18ページの、不登校の児童生徒数の変容をみさせていただくと、確かに小学校6年、あるいは中1中2という数字というのは、全国の中1ギャップと言われている以上には増えてないのかなという風に、しかしひとつの壁がある。でもこれをこう見ていくと、小学校の中学年、あるいは見方によっては低学年から、もしかすると、その芽っていうのがある可能性もあるのかなという風に思います。やはりその中身を考えていくと、小野寺委員がおっしゃったように、年齢に応じて、どういうものを自分自身で獲得していくかな、という部分もありますし、学校を所掌する教育委員会としては、10%近くいる発達障害のお子さんの対応が果たしてどこまでできているのか、やはりそういう部分というのは認識はしているけども、個に応じてですね、文字ベースという、言葉だけではなかなか理解できないのが文字ベースになっているのか、その他いろいろなところに目を向けていくのかということ、現実的には、そういう細かな対応はできていない部分もあるのかな。

あるいは今社会現象で、虐待の問題ですとか、その子供たちを大人の責任においてどういう風にしていくのかという部分がありますので、やはりそこは学校教育と家庭教育、福祉との連携をどのように図っていくかということ、一人一人のところで見定めていかないと、なかなか不登校の一人一人の改善には

繋がっていきにくいのかなと。ですから、そこを見極めて、学校だけでは抱えきれない問題を、福祉だとか教育相談室だとか、ある時は機関だとか、そういうネットワークというものをさらに強固にしていくという体制が必要かと思えます。

○星野市長

はい、ありがとうございます。では、簗輪委員さん。

○簗輪委員

ちょっと視点が違ってくるかなと思うんですけども、不登校の原因は何かというのは僕もよくわからなかったっていう実際の教員時代の体験なんですけども、逆にそれを追及してもあまり意味ないなという結論なんですよね。本人も、意外と何で僕は私は不登校になったのかというのをわからない、というのが大半だったんですよ、体験上ね。だから、原因が何かを探ってしまうところに力を費やすのはあまり益がないなと思ってるんです。一番大切なのは、その子の今ある姿を基本的には受け入れて、これでいいんだよというそういう居場所を作ってやるのが最も大切な最初の対応だという風に体験上からも、そこは変わってないなという風に思うんですよ。

そういうことを僕が思っていて、市内の状況を見ると、例えば昨年、PTAの役員の方の集まりに行ったときに、あすなろに行ってる子どもが、勉強をしなくていいんですか、社会に出たら困るでしょ、どうするんですか、とそういう質問をされたPTAの役員もいらっしやったんですよ。だから、PTAの役員ですらそういう認識状況なんだというのが逆にわかったんですけども。

それから、2年くらい前に内海さんが室長をやっている時に、学校の先生方も、そんな遊ばせるだけでいいのかいと言われたんだとかいう話を直接聞いたこともあるんですけども。不登校の子どもは、まずその子が自分で何でこうなっちゃってるのかわかんないし、一番悩んでるのは当の本人だと思うんですよ。だから、なんでお前学校行かないんだとか、そういうような責め方ではなくて、それでいいんだよとまず受け止めてやって、相手との信頼関係をどう作っていくかっていうことが、ある意味人の、一番大切な取り組みじゃないかなと思うんですよ。家庭がやっぱそれは第一次的に行う必要があるなと。家でやっぱ居場所がなければどこか行かざるを得ないし、もっとひどい行動に出る可能性もあるので、やっぱ行きたくなければ行かなくていいんだよというまずその受け止め方をしてやって、基本的には大変なんですけども、自分で這い出すのを待つというのが大切なのではないかなというのが、1年経っても出てこない、2年経っても出てこないということはあると思うんですけども、そ

これを強制的にやっちゃってはダメで、話をできる関係の人が親を中心に増えていく。

僕が以前いた高校も、退職間際の時には、9割を超える不登校体験者が生徒を占めてたんですよね。やっぱりその、一番悩んでるのは本人だし、このままじゃいけないというのは自分たちでわかっている、いかにしてそこから這い出していけるかというところを彼らは望んでいるので、そういう安心していいんだよという居場所をまず与えてやる。あすなろなんかは僕はそういう良い場所になってるなという風に思うんですけども。そこでの取り組みの良さというのかな、それはやっぱり市内の全先生方にもっと広めていく必要があるんじゃないかな。その理解が無いと、保護者も理解は進んでいかないと思うんですよ。だから、急速に学校復帰を求めてしまうと、逆効果になるだろうと。じゃあ行かなくていいままで良いのかといたら、そうではないっていうのはあるんですけども。

基本的に、先ほど小野寺委員が言ったように、社会的な力が無い子が不登校になるというそういう要因ももちろんあるだろうけども、必ずしも不登校全員が社会的な力が無いかというと、逆は違うだろうという思いもあるし、年齢が行けばそれなりに社会的な力っていうのは、いろんな関係の中で、少しの関係でも僕はついていけるものだっていう風に思うんですよ。だからそこは焦らないで、本人が這い出すまで基本的に待つという、その姿勢で、これを減らすために何か具体的に取り組みをどうする、数字を下げるために何かやるというところに、収斂^{しゅうれん}するような取り組みにしないほうがいいなという風に思います。

○星野市長

そうですね。なってしまった方と、ならないようにするにはどうしたほうがいいかという議論にたぶんなって、なってしまった方に関しては箕輪委員さんが今言われたとおりではないのかなという風に思うんですよ。ですから、ならないような環境がどうやったら作れるのかということで、私としては伺ったんですけども。では、齊藤委員さんどうですか。

○齊藤委員

箕輪委員さんと同じように居場所づくりというのは大事なんだろなという風に思いました。その受け皿がどこにも無くなってしまうと、それこそもっと大変なことになるのかなと。実際、日本を震撼させたある教祖をトップとする教団がね、そこに集まったエリートたちに、裁判になって聞いてみると、そこが自分の居場所だったという方がけっこう多かったという。結局、家でも学校で

も社会の中でも自分の居場所が無くて、そこがもしかすると居心地が良かったからそこに納まってしまったのかもしれないんですけども、そういう児童生徒のための居場所づくりというのがきっと大切になってくるだろうなという風に私は思います。

ただちょっとショックだったのがですね、先ほどの報告を聞いて、中1ギャップというのは聞いてはいたんですけど、中2中3になるとまた増加傾向にあるというのは、私はちょっとビックリしたんですけども。実際平成26年度の富士見市の教育行政方針の中でも、やはり中1ギャップを解消するためにということで、小中連携をね、スタートさせていますよね。実際、西中、関沢小、針ヶ谷小の3校で今、研究委嘱が行われていると聞きました。確かその研究目的が、不登校児童生徒の解消と学力向上を目指す。研究目的を持って今取り組んでいると。2年目でしたっけ。確か2年間ですから、そろそろその答えというものが出てくるんだろうと思いますので、富士見市の中ではね、今後考えるにあたって、良い結果が出てくればね、考えていく必要があるなという風に思います。ぜひこの結果をね、楽しみにしたいなという風に思っています。以上です。

○箕輪委員

ひとついいですか。

○星野市長

はい、どうぞ。

○箕輪委員

どうしたら不登校を防ぐのかという点なんですけど、今の話と合わせて、不登校の子ども小学校の時の状況をカードに書いて、中学校に送るそういう取り組みをやっていて、実際にある中学校はそれまでかなり多かった不登校がその取り組みのせいかどうかの検証は僕も個別にはわからないんですけども、小学校の時の数が、中1ギャップでぐんと増えるのではなくて、同じ中2中3になっても、中1の時とそんなに変わらない、増えてないという数字を見たことがあるんですけども。そういう取り組みの中で、成果は出てるのではないかなという風に思うんですよね。それでその成果をもう少し細かく分析して、他の中学校に広めていくということが必要だなという風に思ったのと、先ほど最初に市長の発言にあったように、おじいちゃんの話。例えばその子は、小学校ではその髪はどうだったんだろうと思ったんですよね。たぶん、良かったんじゃないかな。突然中学行ったらダメだとなったら、当人面喰っちゃうと思うんで

すよね、やっぱりね。やっぱり何か指導するのは、強制ではなくて、指導する相手の了解を得なければ、指導としては入っていかないという基本原則があると思うんですけども、先ほどのカードの活用として、不登校だった子どもだけじゃなくて、小学校の全児童について、次に行く中学校に、こういう生活状況だった。例えば髪の問題も含めてね、天然パーマの状態だとか、元々赤っぽい髪だよだとか含めて、そういうことが受け継がれて、突然お前何々しないとダメだとかじゃなくて、そういう了解として、そういうのは小学校の時は良かったにしても、中学校ではこういう風にしていきたいというようなことを、個別に、いきなりの指示ではなくて、当人と相談して決めるだとか、そういう手立てが必要かなと思うんですよね。そういう意味でカードの利用というのは、不登校に限らず、中1ギャップというのはいろんな場面に出てきて、不登校対策だけじゃなくて、すごく良いものが生まれてきてるなという感じがするので、それを全児童に広げて、中学校に受け継いでいくというのをやったらどうかなという風に思いました。以上です。

○星野市長

はい、ありがとうございます。当初1時間半ぐらいの予定でという風に思っ
て、もう1時間半になろうとしているので、進め方がうまくなくて大変申し訳
ないんですけども。

今も、いろいろ良い意見が出されたんではないかなという風に思います。冒
頭言ったように、不登校になるには、様々な要因があると思います。例えば、
発達障害的なことを指摘をされて、なってしまうお子さんもいるでしょうし、
例えば運動がやっけていても同じようにできなくて、それでなってしまう人も
いるだろうし。だから、それをどういう風にお互いに支え合う、補完する環境を
作っていくかということが、これから教育委員会さんのほうでも考えていた
だいて思うんですけども、今まで以上に求められてくるのではないかなと
いう風に思います。実際に、子どもさんが少なくなっているにもかかわらず、
発達障害の方が減っているかという逆で、増えている傾向にあると。

でも、専門的な先生に言わせれば、それは親御さんがしっかり子どもを見て、
笑わせることによって子どもは発達をしていく。でもそのこと自体も、親御さ
んも多分知らない人が多いわけであって、それによって子供は成長していくか
ら、そんな難しい話ではないんですよ、という話を講演で聞いたことがあるん
ですけども。ですから、トータルで、総合的な窓口を、ひとつの総合的なもの
の見方で、いろいろな環境を作って取り組むことが、そのの間々で、残念なが
らくじけてしまう子を救っていくことになるのではないかなという風に、今日
いろいろな話を聞いていて思ったんですけども。

ですので、時間も時間ですので、締めさせていただくことにしていきたいかなという風に思いますけども、今日、不登校と学力向上というのはある意味ではリンクする部分もあるものですから、次回の時に、今、国で法改正もされました、小中の一貫教育、それから森元委員からも出ましたように、ICTの活用による教育力の向上。実際に資料として、先ほど1枚、冒頭で出させていただきましたけれども、熊本県の山江村というところでは、すでにICT教育をやっていて、その数値が、先ほど出た秋田、福井よりも高いということで、実際問題、そういう風にICTを活用した取り組みをしている自治体も年々増えてきていますので、そういったことも今後検討していく中で、本市においても取り組める環境ができてきたら、しっかりと取り組んでいくことも必要なのかな。

そういった意味で、そういった部分について、今度の機会の時に議論をさせていただけるような形にさせていただくということで、今回第2回はこれで締めさせていただくということでよろしいでしょうか。

1点目2点目ですね、いろいろ貴重なご意見をいただきまして、本当にありがとうございました。これで、第2回の総合教育会議を締めさせていただきたいという風に思います。ありがとうございました。

○清水秘書広報課長

それでは、事務局のほうから1点、会議録の関係ですが、齊藤委員さんと森元委員さんにつきましては、後日会議録がまとまり次第、ご連絡をさせていただきますので、ご署名のほうをお願いしたいと思います。よろしく願いいたします。どうも、お疲れ様でございました。ありがとうございました。

上記会議録の顛末を記載し、相違ないことを証するためここに署名する。

平成27年12月18日

会議録署名委員 市長 星野 信吾

委員 齊藤 久也

委員 森元 州